



中沢集落のめん羊小屋の前で

緑のふるさと協力隊活動報告（文／大草鮎子）

鮫川村×農×大草



緑のふるさと協力隊として昨年4月に鮫川村にやってきた大草鮎子さん。3月15日、無事1年間の任務を終え、村を旅立ちました。

広報さめがわでは、毎月「まめ通信」と題して、彼女の鮫川村での体験記をお伝えしてきましたが、今回、1年間の活動をまとめた報告書が完成しましたので紹介します。彼女が肌で感じた鮫川村はどうだったのでしょうか？

1 協力隊参加の動機

緑のふるさと協力隊として、村でお世話になっていました大草鮎子です。一年間、皆さま本当にお世話になりました。村を離れるとき、壮行会で一度だけ泣きました。それは離れることが寂しい、というよりも、ありがたうの涙でした。暖かい方々に支えられ、新たなことを知り、感じてきた体験はこれからの自分の人生の糧となってい

くことでしよう。人と自然の全てに感謝の気持ちでいっぱいです。何も分からない若者を受け入れ、日々を共に過ごさせていただきました。本当に本当に、ありがとうございました。

私は、「自然と密着した暮らし」を知りたくて、協力隊に応募しました。大学ではまったかヌー、大学の授業を通して学んだ農村文化、ここ数年、自分の根幹にはずっと自然への興味がありません。

ないという特別な視点から見ることが出来たのは非常にいい経験でした。

村の暮らしを楽しくしたいと、頑張る人たちの存在なくしては、今あるものもこれからのものも守れないのではないかと、今動き出している「村」をわくわくしながら見ていました。スタッフの努力により少しずついろいろな繋がりが生み出され、時代に合った、村が進むべき方向が少しずつ開拓さ

れていく現場を間近で見られたことは、自分なんかが見ているだけではもったいないと心から感じたものです。

手・まめ・館を拠点とした協力隊としての活動は、活動と日常の境が明確でなく、自分で得たつながりから、農業や地域の祭り、その他面白そうなことに関わっていくというスタイルでした。

多くの人と関わり、話し、共に汗をかき、同じ窯の飯を食べてきました。人生で一番多く他人の家のご飯を食べることが出来た一年だったはず。偶然の繋がりから生まれたさまざまな人との交流によって、さまざまな視点から村での生活を見ることができ、そこで、今まで気づけなかった大切なものたちにも気づくことが出来ました。

②地域の活動

誘っていたいたり、知り合った方ので集落の取り組みにも参加させていただきました。

落合集落で農大生受け入れ時の昼食づくりを手伝ったり、余所内大平集落で馬込鮫川会ツアーの昼食づくりの手伝いをしたり、真坂

しかし、小さい頃から自然と関わって生きたという思いはありましたが、今まで、具体的に今後に繋がるような経験を積んでいなかった私。自然といつても分野は広く、関わり方は沢山あります。

そうして考えていたところ、たまたま協力隊のポスターを見かけたことをきっかけに、どうせなら興味あるフィールドにどっぷりつかろうと思ひ、鮫川に来て、村で一年を過ごしました。「何を知りたいのか」「その後どうしたいのか」といった明確な目標を持っていたわけではなく、いわば行きたい方向へ進むための第一歩にしようと考えていたのがこの一年でした。

2 鮫川村での活動内容

①手・まめ・館

活動は、村直営の直売所「手・まめ・館」を拠点とし、村内各地を走り回らせていただきました。



大豆などの種子配布（5月）

集落の酉小屋の手伝いをしたり、中沢集落では、めん羊で集落営農を始めようとしている取り組みにも関わらせていただいたりしてきました。

中でも、中沢集落の方々にはめん羊の研修や、セリに同行させていただいたり、柵づくりや看板づくりを手伝わせていただいたりした中で、「地域で生きる」という姿勢、その難しさ、素晴らしさを学ばせていただきました。



ふるさと春まつり（5月）

この土地で生きる。この土地を元気にする。結果だけではなくプロセスを共有していくことで、土地を生かして集落を元気にしていく姿を近くで見せていただき、人間は一人では生きていけないのだということを感じる事ができました。

③役場の手伝い

農林課の「豆で達者な村づくり」関係の仕事や、企画調整課の大学生の農村体験、エゴマ鶏実験飼育、各種イベントの手伝いなど、役場の仕事も手伝わせていただきました。中でも印象に残ったことが「中山間地域等直接支払交付金」の現地確認の仕事に同行したことでした。

例えば、夏は草刈りをする事によって、草で荒れちゃう土地を守っています。でも、村では少子高齢化や過疎化が進み、ピーク時には今の倍の人口で守ってきたものを、現在では生活を営みながら守っていくことが困難になっ

にあるもの」で、人が生活を豊かにしようとしたからこそできた、人との土地の合同作品だと思えます。ある一定期間に多く取れたものを、食べ物が足りない時期に繋いでいく技。漬物や乾物を、今までそういう視点から見たことはありませんでした。

生きるうえで、のつながりも意識できました。鶏を潰したとき、自分以外の命をいただいて生きているのだということを強く感じました。鶏を見たことはありません。鶏肉は食べます。頭の中では、生き物と肉のつながりは当たり前前に知っている知識であるけれど、個性を持った一匹の動物が肉になるというのはどういふことを実際に体験することができ、もっと一つの命に感謝して自分の命を生きたいと思うようになりました。

自分の大豆畑に一度だけ農業を散布したときも同様のことを感じました。農業は「人体に悪い影響を及ぼす」ことは既知のことではあったけれど、農業を使うと畑にいた害虫ではないトンボや、かえるや、ハエや、虫や、さまざまなものを殺します。もちろん、農業で生計をたてたわけではない私だからこそ言える甘い意見なので



ユースカレッジでテーブルづくりに挑戦 (10月)

④農家さん手伝い

手・まめ・館生産農家や、大豆生産農家、その他知り合いになった農家さんの手伝いに行かせていただきました。なにぶん、農業ど素人だったので、迷惑だった部分もあったかもしれませんが、一緒にさまざまな作業をし、農家の生活、村のこと、さまざまなことを教えていただき、汗をかかせていただいたのは良い経験でした。

印象的な人は沢山いらつしゃいますが、『どーだい鮎ちゃん、林業は、スケールでかいばい。大学さなんて歩いてらんねーべ。』と笑顔を見せるじいちゃんの言葉が忘れられません。土を耕し続けることで農地を守るという意味では畑も同じですが、世代を超えた林業のスケールの大きさに、ときめきを覚えてしまいました。

3 一年で得たこと、気付いたこと。

「緑のふるさと協力隊は、やってみないとわからない」と、協力隊同期は口をそろえて言っています。事実、この一年を経て、私も

ですが、人間は身勝手だと思いまして、

勝手に土地でモノを作り、そこに生きる生き物にそれを食べるなど言う。野菜があつたからこそ畑で生きる生き物ができたのであろうにも関わらず、身勝手に害虫や、それと関係ない虫たちまで殺します。でも、そうして作られているのが自分が食べている



東京農大生との強滝遊歩道整備作業 (7月)

それを強く認識しました。一年という期限付きの時を、協力隊という肩書きを持ちここで過ごし、人生の中で一番人にお世話になりながら、多くの人と出会い、多くの体験をし、多くの視点から「村」を見させてもらってきました。

村に一日いても分からないこと、一生いても気付かないこと、ただ20代そこそこの若者が村に

来ただけでは大して何も見えなかったこと、そんなことまでも協力隊の立場がさまざまな視点を与えてくれたおかげで見ることが出来たのではないかと思います。一年いて、得たことは特定の技術や知識ではありません。一年では「知るこゝろ」それだけでいっぱいでした。

ただ、それを「知った」人生と「知らない」人生では、今後の歩き方が変わってくると思うので、そんな自分が知り、感じたいいくつかのことを、ここで紹介させていただきます。と思います。

一つは、さまざまな場面です。土の大切さに気付いたことです。全てをばぐんではいるのは土であり、土地です。それを実感できました。夏にきゅうりやナスを塩漬けし、冬に餅や大根を凍みらせ、さまざまな方法で作る保存食は、人がこの地で生きようとしたからこそ生み出されたものです。



女子大生を前に村での生活や村づくりなどを説明する大草さん (9月)

「この地」で、「こ



江竜田では自分の大豆畑をつくりました

ている方々にも感謝して食べたいと思うようになりまして。

そして、農作業

を始めとしてさまざまな活動を通し、

抽象的ではあるけれど、一年間を通じて私はこう思う

ようになりました。

『自分が興味を持ってきた農村文化。自然と密着した文化。それは、

脈々と昔から繋がっている中で、人が

よりよく、「この地」

で生きるために、

形を変えながら担っ

てこられたものでした。』高齢の方とお付き合いさせていただくことが多く、大豆栽培や、畑仕事を手伝っていく中で、非常に感じたことがありました。昔は、生きることが大変で、そうした中で培われてきたものが、今の景観であり、文化であり、人付き合いの仕方でありました。

ばあちゃんたちにとって、昔の生活は「この地」で生きるための活動だったのです。だからばあちゃんたちは、モノに感謝し、まですべてにモノを作ります。全部繋がりが見えているから。生きる営みが分断されていて、あまりにも「生きる」ことが認識しにくい横浜生活を続けていた私でしたが、生きる営みが分断されているというこ

化を私も担つて、土地に根付き生きてみたいと思います。

「日本の自給率を上げよう。」

「後の世代のために今を繋いでいこう。」「輸入食材が入つてこなくなつても、生きられるようになっておこう。」とそんなこと本気で考えているわけはありません。ただ、それが「面白そうだ」と思つたからです。

視点によつて世界は変わります。よくも、悪くも。自分の視点から



協力隊活動報告会(3月13日)

しかし、まだそれをするには早すぎます。社会的知識も、技術も、何も自分は持っていないことは、学生から離れた協力隊生活を経て強く痛感しました。「長く助走をとったほうがより遠くに飛べる。」そんな歌詞を胸に、あと数年は自分を鍛えていきたいと思います。自然と関わりたいたいという自分の生きたい方向がなんとなく定まりました。

私は、土地を担いたい。そのた

みた村の暮らしは面白かった！それに、万国共通しそうなかつこいい人よりも、村でずっと炭焼きをしていて、それでも満足いく炭をとるのは難しいと笑うじいさまの方が、最高にかつこよく見えました。自分がときめきを覚えた人に習って、自然の中にあるもの、この土地にあるものを大切にして、いつかは土地に根付き、私もそれを担っていけるようになりたいです。



めのツールはまだ見つかっていないけれど、この二年間を糧にして、さらに自分らしく歩いていきたいと思います。

自然と昔、という視点を持つて村に来て、特にそれ以外の何を期待していたわけはありませんでした。ですが、その中で農の面白さ、さらには何にも勝る人の温かさを見せてくださったのは出会ってくださった皆さんでした。一年間楽しく過ごせたのも、生活の楽しさを教えてくださった方々がい

たからこそでした。

学生に戻り、村を離れますが、この一年かけがえのない時間を共に過ごし、大事なことに気付かせてくれたおばあちゃんおじいちゃんや、集落や、手・まめ・館、役場の方、話をしてくれた全ての方々、鮫川村の全てをこれからも応援していきたいです。

本当に一年間、ありがとうございました！

また遊びに行きます！

よろしくお願いします。



大豆集荷作業(12月)

とにすら気付いていませんでした。

4 そして、今後

そして協力隊生活を経て、私はこの一年で培った、垣間見た、農的生活を大切にしたい。いつかはそういうものを担いたい。と思うようになりました。

4
そして、今後

朝梅朝茶は断るな。知らない人にでも「あがらつしよ」と気軽に招き入れる心意気。きのこをハエ取りに。オトギリ草は焼酎付けにして傷口に。フキは噛んで蜂刺されに。山椒はすりこぎ棒。黒文字はつまようじ。こうずの木は紙になる。竹は編んで、籠にして。ワラはもじって、何にでもなる。味噌を自分で作れる暮らし。お酒を

ていきます。100年前のおばあちゃんの知恵と、私が出会ったおばあちゃんの知恵ではきつと大きな違いがある。伝統的だといわれている食の味だって、醤油や味噌の作り方から違うのだから、昔と同じ味なはずはありません。昔にとらわれるのではなく、温故知新の気持ちを大切にしていきたい。そう思うのです。

大学の授業で、「人の社会は生態系に根ざした文化から成り立っている。今の時代は、都市の暮らしを始めとして、生態系から人間の暮らしが逸脱してしまっているから、おかしな方向へ進んでいる。行き詰っている。これから、生態系に根ざした文化に目を向けて、全く新しい価値観が醸成させられる時代となる。」と、言っている。

いる先生がいました。ふーん。と思ひながら聞いていましたが、村に来て分かりました。そつか。こういうことか。大事なのは、村での暮らしを通して、さまざまな経験を積み、そう思うようになったのです。

仕事で関わる。生活していくうえでそれを担っていく。また方法とはわからないけれど、いずればあちゃんたちが大切に担ってきた文



東京農大の収穫祭では、「手・まめ・館」の商品をPR(11月)